

井深梶之助と明治学院同窓会

明治学院大学客員教授 中島耕二

はじめに

アメリカでは Alumni Studies, Alumni Survey, Alumni Research 等の「同窓会学」が確立され、The Council for Advancement and Support of Education (CASE)という専門の学会も存在する。しかし、日本では高等教育機関の同窓会を専門分野とする研究者は見当たらず、当然学会も存在しない。従って、日本の諸学校の同窓会に関する統計的な資料がないため、本稿は個人的調査にもとづいて報告されるものであることから、客観性に欠ける点をご承知置き戴きたい。

1. アメリカの大学の創立と同窓会

近代日本の教育制度はアメリカをモデルに整備されたこと、また取り分け明治学院はアメリカの宣教師が中心になって作り上げたことから、まずは本家アメリカの大学史を概観して置こう。アメリカで独立以前に創立された大学 (Colonial College) を古い順に並べると以下となる。

創立年	大学名	設立母体
1636年	ハーバード	会衆教会 (Congregationalist)
1693年	ウィリアムズ&メアリー	聖公会 (Anglican)
1701年	イェール	会衆教会 (Congregationalist)
1746年	プリンストン*	長老教会 (Presbyterian)
1754年	コロンビア	聖公会 (Essentially Anglican)
1755年	ペンシルバニア	非教会 (Primarily Secular)
1765年	ブラウン	バプテスト教会 (Baptist)
1766年	ラトガース*	オランダ改革教会 (Dutch Reformed)
1769年	ダートマス	会衆教会 (Congregationalist)

* 明治学院の母体となった教会が設立した大学

一目瞭然であるがペンシルバニア大学以外はすべて教会によって建てられている。これはアメリカの伝統的大学の同窓会活動を考える時、極めて示唆的である。それは大学 (高等教育) = 教会 (伝道) という概念が根底にあることである。アメリカの大学で最初に同窓会が出来たのは 1821 年のウィリアムズ大学であるが、その目的は「教育を受けた母校の支援・援護・発展を目指して、支援体制を統合した卒業生組織」作りであった。もちろん各大学には早くからクラス・メイト間の親睦を図るユニオン (クラス会) が存在し、また個人的に母校へ支援する活動も行われていたが、長い間、同窓会設立には至らなかった。ウィリアムズ大学に続いて、1826年プリンストン、1831年ラトガース、1840年ハーバードなど諸大学が同窓会を設立したが、その動機は、母校の混乱、弱体化等に対する「支援」

にあった。卒業生同士の親睦はユニオンで行い、同窓会は「母校への支援」（今日では寄付戦略、カリキュラム改革、組織改善、就職斡旋、大学評価まで関与）を行うというコンセプトが確立された。21世紀の今日、ハーバード大学は「大学基金（Alumni Fund）3兆円規模」と言われている。

2. 日本の私立高等教育機関における同窓会

日本の私学を代表する慶應義塾において、同窓会の活動が始まったのは1880（明治13）年頃、義塾が財政面で経営難となり福澤諭吉や小幡篤次郎らの学校責任者の呼びかけで、卒業生が支援のため参集したことがきっかけとなったと言われる。これを受けて「義塾同窓会」が全国的に組織され、寄付が定期的に行われるようになった。本格的な同窓会の組織は、1898（明治31）年に義塾の同窓会報『三田評論』の創刊時とされる。ちなみに現在の同窓会組織である「三田会」の組織力は、2008年の創立150周年記念事業に285億円を集めたことで実証される。（早稲田大学稲門会も2007年の創立125周年記念事業に200億円以上を集めたという。）

また、慶應義塾では三田会とは別に、義塾の発展を財政面から支援する「慶應義塾維持会」という組織も作られていて、常時義塾への寄付が可能な仕組が出来上がっている。この組織も広義の同窓会活動と言えよう。

3. 井深梶之助と明治学院同窓会

会津で敗戦を経験した井深梶之助は1871（明治4）年、18歳の時に横浜修文館の学僕に採用され、ここでS.R.ブラウン博士と運命的出会いを体験し、その後1924（大正13）年、71歳で明治学院を完全に引退するまで、明治学院とともに歩む人生が定められた。

明治学院における同窓会活動はいつから始まったかという問いに答えるのは、中々難しい。井深梶之助が一期生として学んだ東京一致神学校の出身者は、大半が日本基督一致教会（のちに日本基督教会と改称）の教職者となったことから、中会や大会で顔を合わせることになり、自動的に同窓会になっていた。また、1880（明治13）年に築地大学校が出来ると、キリスト教伝道と英語奨励の目的で校内に「共励会」が組織され、後身の東京一致英和学校時代に盛んになり、在学生と卒業生が会員となって毎週土曜日に会合が持たれていた。この会は会長、書記、会計および商議員を置き、卒業生が参加していた点で、「同窓会」の始まりと言えなくもない。

史料の上で同窓会の名称が確認されるのは、1890（明治23）年7月4日付け『福音新報』十七号の記事である。

六月廿四日…同午後四時半より「サンダム」館礼拝堂に於て第二回定期「アロムニ」会を開く会長井深氏祈祷を以て議事を開き投票を以て役員を改撰す会長田村直臣氏副会長山本秀煌書記石本三十郎氏当撰前書記山本秀煌氏の報告に依れば「本年四月邦語神学部卒業生拾九名本日普通学部卒業生六名都合式拾五名

の会員増加・・・現今会員は百十一名あり」

この記事から、明治学院「アロムニ」会は前年の 1889（明治 22）年に設立され、初代会長に同年明治学院副総理となっていた井深梶之助が選ばれていたことがわかる。そして、次期役員選挙が行われ井深と東京一致神学校で同期であった田村直臣が新会長に、新副会長に同じく同期の山本秀煌、新書記には築地大学校出身の石本三十郎がそれぞれ選ばれていることから、この「アロムニ」会がオール明治学院の同窓会組織であったことが確認される。

井深梶之助はこの年の 8 月、ニューヨークのユニオン神学校に留学のため横浜港を出航した。その後「アロムニ」会は、翌明治 24 年および 25 年の開催が確認されるが、1894（明治 27）年には井深梶之助ほか世話人となり「神学部同窓会」が起案され、7 月の日本基督教会の大会に合わせ第一回同窓会を開いていることから、それまでの「アロムニ」会は自然消滅したものと思われる。その後の「神学部同窓会」の活動状況は未調査であるが、1903（明治 36）年 9 月 30 日に新たに「明治学院同窓会」が組織され、初代同窓会長に総理であった井深梶之助が選ばれ、同年 12 月には同窓会誌『白金学報』も創刊されて、井深梶之助総理を中心とする同窓会組織が確立された。この同窓会は、現在の中学校・高等学校生徒、大学学友会（在学生の体育会、文連会等）と同窓会を合体した組織で、卒業生を会員とするいわゆる「同窓会」とは趣の異なるものであった。発案が井深梶之助であったかどうかははっきりしないが、在學生と卒業生を一体化し、オール明治学院の活動にしようとしたことは当時としてはかなり進んだ考えで、井深の思想が入っていたように思われる。

1904（明治 37）年 12 月に新たな明治学院同窓会規則が定められ、その第二条で「本会の目的は知、徳、体の円満なる発達を期し兼て会員相互の親睦を厚うし以て校風を振起するにありと称す」とし、会員は名誉会員（推薦）、賛助会員（旧現教職員）、特別会員（卒業生）、普通会员（在學生）の 4 種からなり、主体は普通会员と呼ばれた在學生で、その教育に重点が置かれていた。その後、1917（大正 6）年 10 月に、明治学院中学部学友会が設立され、そのため従来の同窓会は解散となり、同年 12 月に大幅に改組した新しい同窓会が発足した。

同年 12 月に新たに制定された明治学院同窓会規則の第二条は、「本会の目的は明治学院の維持発展を謀り兼ねて会員相互の親睦を敦うするにあり」と変更され、会員は正会員（前身校も含めた卒業生）、賛助会員（旧現教職員）、名誉会員（推薦）の 3 種となり、従来会員であった在學生は除外された。同じ「同窓会」という名称であったが、新旧の同窓会はその性格を全く異にした。やがて、井深総理は老齢を理由に 1919（大正 8）年、同窓会長を辞任した。この時、同時に同窓会規則が改定され、従来の会長制を廃し、幹事 5 名による共同運営体制とした。1921（大正 10）年、井深総理は 30 年間務めた明治学院総理を辞任し神学部長に退いた。

強いリーダーシップによって学院を束ねていた井深梶之助の引退もあって、1923（大正12）年7月に高等商業部に「明治学院商科同窓会」が設立され、1929（昭和4）年には「高等商業部同窓会」に拡充、発展し、既設の明治学院同窓会と併存競合する状態となった。この状況は両者間に種々問題を発生させ、オール明治学院を思う同窓生を悩ませていたが、1937（昭和12）年ようやく高等商業部同窓会が明治学院同窓会に合流し、同窓会の一本化が実現されることになった。この時、この合同を推進したのは学院同窓会評議員兼高商部同窓会役員であった伊藤毅であった。伊藤は以下のように訴えた。

全学院同窓会は四千人に近い会員を持っているが、会費納入者はその一割という薄弱な組織である。これに較べると高等商業部同窓会は、創立の日が浅いだけに全会員の纏まりがよく、大部分が終身会費の納入者で基本金があり、名簿の整理はよく行われ、誠に立派なものである。しかし吾々、高商部卒業生としても、明治学院あっての高商部のことであるから、全学院同窓会を忘れるべきではない。もし高商部同窓会を全学院同窓会に合体せしめることによって、全学院同窓会が更生するとすれば、吾々は此の合同を宜しく実現せしむべきものであると思う。

両同窓会の合同の後、1938（昭和13）年8月に同窓会規則の第二条が、「本会は会員相互の親睦を敦うし、明治学院の発展に寄与するを目的とす」と変更され、目的の第一が母校支援から親睦主体となった。また、この時会長職が復活したがその理由は何であったのか、時代との関わりがあったのか、これらはこれから調査して見たい。

4. おわりに

私学における同窓会の原点は、やはりウィリアムズ大学や慶應義塾に同窓会が出来た動機である「教育を受けた母校への支援」にあると考える。明治学院は歴史を振り返って見ると、その創立当初からミッションの経済援助を長く受けてきたことから、こうした意識が全学院に養われない伝統が出来てしまったように思われる。しかし、少子化が急速に進む昨今の日本社会にあって、私学として建学精神を守り発展を持続するためには、高い水準の教育と優れた教育環境を整え続けなければならない。そのためには同窓会にもその一翼を担う大きな責任があり、そして今、直接、間接にその支援を大きくして行くための方策を早急に講じる必要があるように強く感じる。

以上

*本稿は2015年1月17日（土）、明治学院大学白金校舎本館10階大会議室で開催された、「明治学院同窓会新年交流会講演」に若干加筆・訂正を加えたものである。